

# 近世文学にみる平将門

はじめに

本論文は近世文学に描かれる平将門について論じるものである。

平将門は桓武天皇の曾孫で、平安時代中期の武将、自ら「新皇」と名乗って東国に内裏を造り朝廷と敵対した人物である。

平将門には種々の伝説が備わる。将門が亡くなった後のことを語る冥界伝説、将門の遺児に関する子孫の伝説、将門が打ち取られた後も首だけで生き続けて身体を求めたという怨霊伝説、将門が鉄身で七人に分身する超人伝説などである。冥界伝説は『将門記』（作者・成立年不詳）、子孫の伝説は『今昔物語集』（作者・成立年不詳）「陸奥国女人依地蔵助得活語第二十九」などに、超人伝説と怨霊伝説は『太平記』（作者・成立年不詳）や『御伽草子集』（作者不詳・室町時代成立）「俵藤太物語」などに記されている。

## 進士 みづ葵

本稿では近世文学に焦点を当て、作中にどのような伝説が取り入れられ、将門がどのような存在として描かれているのか考えてみたい。具体的に取り上げる作品は下記の通り。近松門左衛門『関八州繫馬』・江島其磧『女将門七人化粧』・山東京伝『将門』時代世話二挺鼓』・同『善知安方忠義伝』・同『神田利生』王子神徳』女将門七人化粧』・曲亭馬琴『報讐癡狂夫』などである。

議論の方法としては、それぞれの作品について、先ず梗概を述べ、次に特徴的な場面を取りあげて作品を概観したうえで、近世文学における平将門の特徴を考察することとする。

### I 近松門左衛門が描く平将門

『関八州繫馬』近松門左衛門作 享保九年（一七二四）一月大坂・竹本座初演

## 梗概

永延二年宮中に夜な夜な変化の黒駒があらわれ人々を悩ませていた。そのため命を受けた頼光はその化け物を退治しに行く。化け物の正体は昔滅ぼされた平将門の家紋が付けられた旗指物であり、将門の怨念の仕業だということが判明した。頼光は将門の嫡子將軍太郎良門が再び謀反を企んでいるという予兆と見て警戒する。

一方、良門は将門の仇を討つため妹の小蝶を頼光の館に潜入させ、復讐の機会をうかがっていた。小蝶は頼光に近づくとうちに頼光の弟である頼信を恋慕うようになっていった。頼信には詠歌姫という恋人がいたため、小蝶は頼信の弟・頼平をそそのかし頼平と詠歌姫に契りを結ばせてしまう。その後、伊予内侍が頼信の妻に決まってしまうと思惑が外れた小蝶は、今度は内侍殺害を計画する。この計画を知った頼光の御台所は、小蝶の後をつけ、良門と内通している現場を目撃する。小蝶は成敗され、本名を名乗り恨みを残して死ぬ。良門は危ないところを小蝶の怨念により助けられ逃げ延びる。

詠歌姫と駆け落ちした頼平は良門の一味と出くわし、詠歌姫を人質に取られてしまう。詠歌姫を助けるため、頼平は良門の味方に加わるが、頼光に捕らえられ死罪が決定してしまふ。その後、頼平の乳母である渡辺綱の伯母の切なる願いや詠歌姫の献身などにより、頼平は罪を許され源家

に復帰する。この時、良門捕縛の知らせがあり、良門は頼光の前に据えられる。頼平は、良門との盟約を無にしない印としていったん良門を見逃す。頼光は、良門に繫馬の旗印を与え戦場での再会を約束して、良門を釈放する。

ところ変わって頼信の妻・伊予内侍は物の怪に悩まされていたが、その正体は小蝶の怨霊であった。小蝶は葛城山の土蜘蛛と名乗って襲い掛かるが、頼光の刀・膝丸の威力に退散し、内侍の体調は回復する。そしていよいよ葛城山での最後の戦いが幕を開ける。

## ・宮中を騒がす妖怪

召さる、条余の義にあらず。去る比より宮中にふしぎの変化。形は尋常くろの駒。刻限も午の時。いづくより来る共なく御垣のもとにあらはれ。左近右近の木のもとに飛くるひはね廻り。殿上台盤へもかけ上らん勢ひに高いなき。左右馬寮の官人馬部の仕丁組みとめん。つなぎとめんと追廻せ共。眼にさへぎる計にて手にとられず。有験の高僧貴僧に仰せ大法秘法を修せらるれ共。さらに其しるしなし。君いとけなく清濁をわかたせ給はぬ叡慮に。不徳の御誤り有べき様なし。かゝる妖怪は撰政たる兼家が責一人に帰す。諫を奉り非を改めるは君臣の常道。所存残さず奏聞。有べしとぞ仰ける。(二丁オモテ・二丁ウラ)

・妖怪退治と妖怪の正体

化生は只今武將のさきにしづまつたり。此変化の本体。障碍をなすにゆらい有べし。占仕れ（四丁ウラ）

天慶三年三月日と計にて。ことの差別もわきがたく重てふしぎを増しにける。頼光具に明察あり。此書付々の年号年月を考るに。朱雀院の御宇。平親王將門が亡し時に相当る。伝へ聞く將門が厩の辺に客星落て竜馬と成<sup>ル</sup>。是我身を立べき吉相。相馬の家の軍神馬頭大明神と尊仰し。其由緒によつて旗指物の紋所。隠れなき相馬の家の繫馬。然るに承平年中より関東にはびこり。既に王位を覆さんとせし所。俵藤太藤原の秀郷是を誅罰し。其証に献じたる將門が旗指物。此櫃に納りしと存るに差ふ所有まじ。彼將門が末子成人し。密に將軍太郎良門と名のり。或は民家に押し入強盜。又は山野に山だちして財宝を奪ひ。籠城の端をあらはすよし。頼光が謀の者共告しらす。親子同気を相求るの奇特。將門が魂入たる幕の紋の馬。此時をえたと覺候。免許を蒙り今日より。洛中を夜廻り致させ非常を糺し。將軍太郎が鋭氣を挫。弥四海太平の忠勤を抽奉らん（五丁オモテ〜六丁オモテ）

このように、妖怪を退治しその正体を調べたところ、將門の怨念の宿った繫馬の紋所がつけられた將門の旗指物だということが判明する。

・変化する小蝶

うしろにすつくと小蝶がかたち。一人六臂の変化をあらはし。汝知らずや我そのかみ。南閩浮州にわだかまり。かづらき山に年をふる土蜘蛛の精霊也。大日本を押ししまかいになさんと。將軍太郎が心に加被しかひも情の道にうばはれ。屍計は泥土となんぬ。猶魂魄は五行造化の氣にとどまる。一念只今思ひ知れ（八十四丁オモテ）

本作は、將門の怨念が憑いた馬が倒される場面から物語が始まり、その後、將門の意思を受け継いだ將門の遺児、良門と小蝶が天下を押し領するため戦う。小蝶は六本の腕を持つ妖怪に変化している。「一人六臂」という言葉から、將門が七人に分身するという伝説が多少なりとも想起される。

II 江島其碩が描く平將門

『女將門七人化粧』江島其碩作 享保十二年（一七二七）刊

## 梗概

平将門という武士がいた。生まれつき剛毅で武勇が人より優れており、変化の術を使い、関八州に猛威を振るって驕りを極め、酒宴淫楽の日々を送っている。清州という美妾がおり将門の寵愛が深かった。政事を等閑にする将門に、家臣・御厨六郎公連が諫言し、清州にも気をつけるよう忠告するが、佞臣・常陸之介に阻まれる。清州にはもと許嫁がいたため清州の父親は将門に仕えることに反対していたのだが、常陸之介が清洲の父を殺し、清州には親の申しつけと偽って将門のもとに連れてきたのであった。その後、清州は将門からあらぬ疑いを掛けられ、将門のもとを離れて悪四郎の妻となる。清州は将門の疑いを晴らすため、宿していた将門の子供を産んだ後、尼となって諸国行脚にでかける。旅の途中、将門が戦死したことを知った清洲は、将門を殺めた秀郷を討つことで将門に対する忠義を示そうとするが、本当の敵は清洲の父を殺し将門に酒や色を勧めた佞臣・常陸之介であることを知り、常陸之介を討つ決心をする。その後、清州は思いを果たせぬまま亡くなり、清洲の娘・将姫が常陸之介を討つ旅に出る。

## ・将門の描写

其性強毅にして。武勇人に超。変化奇正の術。さらにわが物として。むかふ所の軍に勝ずといふ事なく。関

八州に猛威をふるひ。をのが勇力にはこり。日々に驕をきはめ。大酒を好み色に耽て。近国より美女を集め。酒宴淫楽に日を送りぬ。(一之巻・三丁オモテ)

元来将門。神変魔法の術を行ひ。一身七人の像にあらはれ。七人一所に勇力を出して働けば。七人の将門を一時に討とらん事。(一之巻・二十三丁オモテ)

かくて貞盛秀郷は。天慶三年三月廿五日に開陣有て。賊首平の将門が首を。獄門にかけてさらされしに。三月迄色変ぜず。眼をもふさがず。つねに牙をかみて。切られし我五鉢いづれの所にかある爰に來れ。首ついで今一軍せんと夜な／＼よば、りける所に。いかなるものかしたりけん

将門はこめかみよりぞ切られける俵藤太がはかりことにて

と書付て。獄門の木にはりければ此頸から／＼と笑ひけるが。眼たちまちふさがつてその尸つみにかれにけり。誠に奇怪の事どもなり(一之巻・二十七丁オモテ)

## ・将門の滅亡

諸卿僉議有て。俄に鉄の四天を鑄奉つて。比叡山に安置し。四天合行の法を行はせらるゝ。此法力によつ

て。軍最中に天より白羽の矢一筋降来つて。将門が眉間に立ければ。つゝに俵藤太秀郷に首をとられ。一類ことごとく滅亡して。さしも玉を琢。珊瑚をつらねて内裏と名付し館も。忽に灰燼と成て。煙のみ残りり。(一之卷・二十三丁オモテ)

#### ・将門の能力

次第をくはしく語れば。後の障子をさらりとあけ。あるじにかはらぬ同じ姿の女中六人立ちならび。(三之卷・二十四丁オモテ)

然らば他人二魂を宿せんより。親也子也二世の縁を結び。我魂を汝にうつす間。七人の姿を以て。(中略)此魔術の魂をうけつぎ。(三之卷・二十五丁オモテ)

時に将姫男体の気色に変わり。我は是平親王将門が霊也。佞臣に迷はされ。色酒に本心を取失ひ。奢の余りに天道をおそれず。もつたいたなくも王位をかたふけ奉らんと。おもひ立たる邪悪のつもり。(中略)泉下の恨みを散ぜんため。娘将ひめに魂魄をやどし。七人の姿を顕し。(五之卷・二十四丁オモテ)

#### ・神田明神となる将門

今本望を達せしうへは。当来未来二世共に。思ひをく事更になし。此後は世の人の守護神と現じつゝ。国家安全五穀豊饒。所繁昌と守るべしと。金色の玉将姫の懐より飛出ると見ゆるとそのまゝ。七人の姿は消て影もなし。秀郷父子は此旨を。一、奏聞し給ひて。神田大明神とあがめ奉りて。神徳日、あらたにして。祈るに諸願成就せずといふ事なし。(五之卷・二十四丁ウラ)

この作品では、将門が七人に分身するという伝説、将門の切られた首が枯れずにしゃべりだすという伝説が取り入れられ、将門が神田明神となるといふ話が付け加えられている。

#### III 山東京伝が描く平将門

一 『将門秀郷 時代世話二挺鼓』天明八年(一七八八)刊

#### 梗概

六一代朱雀天皇の御代、天慶年間、平将門は東国に猛威を振るっていた。そこで藤原秀郷が勅命を受け将門の討伐に向かった。将門は東国に非公認の内裏を造っており、秀郷は将門に対面し早業くらべの勝負を持ちかける。将門が勝ったら秀郷は味方に付き、秀郷が勝ったら内裏を潰すという約束で勝負が始まる。将門は七人に分身(秀郷には見

つからないうように) して料理を拵えたり、遊芸をしたりするが、それよりも速く秀郷が料理や遊芸をするため、将門は負けてしまふ。ついに将門は七人に分身した姿で秀郷の前に現れ戦いを挑むが、秀郷が日頃信仰している浅草の観世音を念じると、観音が千の矢を放ちその内の七本が七人の将門のこめかみに当たり、秀郷が首をはねる。

・将門の描写

平の将門東国に猛威をふるひ、人民これを嘆きければ  
(一丁ウラ)

われまことは姿が七つあるから、かく早業也。汝はよもや此まねは出来まいと七ツの姿をあらはして見せる。(六丁ウラ)

・将門が倒されるとききの描写

秀郷は打物業にて敵ふまじと、日頃念ずる浅草の観世音を念じければ、不思議や雲中に観音現れ給ひ、千の矢先を揃へて射かけ給ふ。

観音様も鈴鹿山このかた、久しく矢を放ち給はぬゆへ、千の矢先九十三筋まで外れしが、残りの七筋、七人の将門がこめかみに当たる。(九丁オモテ)

将門は大悲の矢先にかゝりて弱りし所を、秀郷すかさず立寄つて、首を刎ねければ、不思議や、切口より血潮虚空へ吹き上げ、七つの魂飛出る。(九丁オモテ・九丁ウラ)

『将門 秀郷 時代世話二挺鼓』では、戦闘ではなく早業によって勝敗が決まる。山東京伝は、謡曲「田村」に依拠しながら、七人に分身する将門伝説を取り入れ、将門に滑稽な所作を演じさせている。四丁ウラには七変化の所作事が描かれていたから、将門が自分の姿に分身するのではなく別人に変身する趣向があらたに設けられていることになる。

二 『神田利生 王子神徳 女将門七人化粧』寛政四年(一七九二)刊<sup>(四)</sup>

梗概

江戸に玉屋九兵衛という紅商いをするものがいた。店が繁盛したため、新しく伽羅の油・紅白粉・香具類の商売を始めようと、日頃から信心していた稻荷に参詣する。九兵衛の祈りを聞いた稻荷は、靈験あらたかな神田明神に九兵衛の店の繁盛・子孫長久を頼む。神田明神の御神体である平将門はその願いを受け、七人に分身できる力を使って九兵衛の店の引き札(チラシ)を多くの人に配った。引き札は日本国中に行き渡り、天竺や異国、女護の島、竜宮にまで広まっていった。おかげで九兵衛の店は繁盛し、九兵衛

の一家は幸せに暮らした。

・将門の描写

さいわひ神田の明神様は、かねぐ御心安く、殊に靈験あらたなる事、世にいちじるき御神なれば、玉屋九兵衛が商い繁昌、子孫長久のことを、ともぐ守らせ給へと、お頼みのお使ひを遣はされけるぞ有難き。

(二丁ウラ)

・九兵衛の手助けをする将門

明神様の御神体の将門様は、玉屋が店繁昌の事を請合給ひ、まづ引札をずいぶん残りなく引、世の中へ弘まるやうにせねば商いが手広にならぬ。したが、そうぐは手が届くまひと、御推察あつて、七人の小僧に現じ給ひ、引札を配り給ひければ、遠方までも残りなく行き届きける。(三丁ウラ)

明神様の神風にて、天竺へも玉屋が引札を吹上給ひければ、月宮殿の天人達、殊の外喜び給ひ、(中略)また明神様の神風にて、下界より奴風を上げ給ひければ、これ幸いと、まだ店開きもせぬ先から、此風を使ひにして、いろぐ調へによこし給ふ。(四丁ウラ・五丁オモテ)

古今無双の大当り、いやが上にも賑やかにしてやらんと思し召し、将門様、七色の姿に現じ給ひ、まづ金太郎は紅、山姥は白髪元結、女伊達雁金のお文は文七元結、実盛は黒油、業平は美男鬘、小町は美人水、神田の台の与吉が女房は毛生葉を下されと、都合七人連れにて、思ひぐの代物を、そこへもこ、へもと買ひ給ふ。(八丁ウラ)

さるほどに玉屋九兵衛は店を開きしより、日に増し大入大繁昌して万代不易の店となりければ、売溜を数へるも、中々手が回るまひと、将門様、又、七人の形を現し、これまでを手伝ひ給ふ。(十丁ウラ)

以上のように、将門は、神田明神の御神体、家の守り神として登場している。商いを手伝うさい、将門は自身が七人になるのではなく、異なる人物七人に変身している。  
『将門 時代世話二挺鼓』四丁ウラの所作事を発展させた趣向といえるだろう。なお、この作品では分身以外の伝説は取り入れられていない。

三 『善知安方忠義伝』文化三年(一八〇六)刊  
梗概

人王六十一代朱雀帝の時代、相馬小次郎平将門という人物がいた。将門は、朝家を傾け、帝位に登ろうと思ひ立ち、承平二年、下総国石井郷を都として新たに大内裏を造営した。将門の家臣・六郎公連は将門を諫めたが、将門は聞く耳を持たなかつた。公連は竜逢・比干の例にならない腹を切つて死ぬ。将門は公連の家を没収し、息子の次郎安方を追放する。安方は妻の錦木とともに奥州外が浜に下り、本名を隠して細々と暮らす。

将門軍の力が衰え近頃は敗戦が続いていると聞いた安方は、主君を案じ、下総国を目指して旅立つ。その途次、戦に敗れた将門の家臣に会い、これから生まれてくる将門の子供を僧にして、亡くなつた将門一門の菩提を弔わせてくれと頼まれる。

戦乱を逃れた将門の娘は、髪を下ろし如月尼と名乗つて乳母と供に将門の菩提を弔つていた。程経て、将門の遺児・平太郎（良門）と知り合い、三人で暮らしはじめる。平太郎は如月尼に仏道に励むよう勧められるも、姉の教えを聞こうとはしなかつた。

ある日平太郎は山に入って、蝦蟇の精霊に会い、自分が将門の息子であることを知らされ、父将門の野望を遂げる決意をする。如月尼も精霊の妖術によって心を変えられ、兄弟で将門の敵を取ろうと画策する。一方、兄弟を見つけた安方は、叛逆の意思を聞いて諫めるも、殺されてしま

う。兄弟は、謀叛を起こすべく準備を進めていく。（この作品は未完であるため結末は不明である）

#### ・将門の描写

其為人狼戾にして、礼法に拘ず、非望を謀て朝家を傾、推て帝位に登んとおもひ立、承平二年下総国石井郷に都を建、新に大内裏を造営して、二十二の門、七十二の前殿、三十六の後宮、尽く金銀を鏤め珠玉を飾りければ、其費いくばくと云事をしらず。（前編卷之一・一丁オモテ）

前年将門の首を掛けられたるに、眼しばらくかれず、剩かの首よなく笑ひて、軀あらば今一度合戦すべきものをとよばふ。時に藤六が見て、

将門は米噛よりぞきられける俵藤太が謀にてと口ずさみければ、忽眼をふさぎけると云伝ふ。（前編卷之三上冊・四丁ウラ）

此官印はそのかみ某奪得て、将門君にさ、げたるが、時いたりて再見る奇しさよ。奇妙の術を得玉ふうへに、官印御旗あるからは、味方を集る便十分なり。（）将門君陣中にて影武者をつかひ玉ひ、御姿を七人に見せ玉ひしも思ひいだされぬ。鬼神をあざむく猛将の本



懐も遂げ玉はず、かく白骨となり玉ふいたはしさよ。

冥途に於てもさぞ口をしくおぼされん（前編卷之四・

十九丁オモテ・十九丁ウラ）

将門の人となり狼戾であつたこと、将門の切られた首がしばらくのあいだ生きたまま言葉が発したこと、将門が影武者を使つて自身が七人いるように見せかけていたことが語られている。

・平太郎（良門）の能力

かくて平太郎成長するにしたがひ、なべての童とおなじからず、大力強氣にして、常に山守獵師等の子どもを相手に角力をとるに、おのれ六七才の頃十三四才の子どもを投ること、毬をあつかふが如し。（前編卷之一・十二丁ウラ）

かれ幼稚して力つよく胆ふときは、まさしく将門君の生質をうけつぎたるものならめ、うたての事や、此儘にて生立ば、いかなる大事を引出さんもはかられず、今のうちによく教戒するにしかじ（前編卷之一・十三丁オモテ）

我亡父孝養の為、一挙の義兵を起すべしと、さま／＼

に身を扮して諸国をめぐり、味方を集るといへども、いまだ補佐の良将を得ず。（中略）我肉芝仙といふ異人にあひ、天竺蝦蟇仙の伝法、蝦蟇の妖術を学び、霧を起し雨をよび、兵を避、自縛を解の術を得たれば、たとへ畊におち入とも、いかでか脱ざらんや。我術の妙を見すべしといひて、手に印をむすび、口に呪文をとなふるとひとしく、良門が姿七人となり、いづれを飯の姿いづれを真の姿と辨じがたし。や、ありて六人の飯の姿は尽くきえ失ければ、伊賀寿を始、衆賊みな、呀と感る声、しばらくはやまざりけり。（前編卷之四・十八丁ウラ・十九丁オモテ）

平太郎が父の性質を受け継いで臂力が強いことが語られているが、七人に分身する能力は蝦蟇精霊から授けられた能力であつた。前に引いた前編卷之四・十九丁オモテ・十九丁ウラの本文で確認したように、本作の将門は影武者を使つて七人に見せていたから、分身する力は将門から受け継いだものではかつた。

・平太郎（良門）の野望

父生前に望をとげず、恨を黄泉に抱て五瀝の形はやぶる、といへども、一霊の神はなほあきらかならん。我村中に為人身不肖にして、父が英雄には似ずといへど

も、今より其志をつぎ大儀を起して、一天四海を掌に握り、百敷の大宮人にかしづかれて、百官万民を眼前に照さば、父の孝養此うへはあるべからず。もし活て其志をとげずは断食して死し、内海外界の悪神邪慢我慢の魔王に誓、一念悪霊となりて、天下をくつがへすべし（前編卷之一・二十五丁オモテ）

・如月尼（滝夜刃姫）の野望

あな口をしゃ残念や。我神功皇后のためしにならひ、自鉄鉞をとりて万国を征伐し、亡父の宿恨をはらさんと大儀を企つるに、事半にしてあらはれしは誠是運命のつたなき所也。たとひ此身は死するとも一念の悪霊となりて、天下を乱さでおくべきか（前編卷之五・十七丁ウラ）

時に怪哉滝夜刃姫の胸間より、一道の妖氣立のほり、一ツの蝦蟇あらはれて空中に飛去けるが、姫忽本来の菩提心に帰し、これまでの積悪露ばかりもこゝろにおぼえず、何ゆゑ自殺せしことぞと、みづからいぶかりけるが、かへりてすこしも苦痛をおぼえず、忽直指人心の深味を大悟し、結加趺坐し、眼をとぢて一頌を唱て曰

閃雷光 撃石火

「貶<sub>レ</sub>得眼」 已蹉過

と唱おはりて、ねぶるがごとく遷化しけるが、折しも天井焼落て、見る／＼姫の尸を灰燼となしにけり。是乃肉芝仙蝦蟇の妖術を以て姫の胸間にわけ入、種々の暴悪をなさしめけるが、姫宿善の果報あるにより、最期にのぞみて蝦蟇はなれ去、忽三藐三菩提の本心に帰しけるなり。（前編卷之五・十八丁オモテ・十八丁ウラ）

右のように、姉と弟は天下を奪えなかつた場合、悪霊となつて天下を覆すと語っているが、姉の滝夜刃姫は殺されたのち、姫の体から蝦蟇の妖氣が抜け、元の菩提心の強い如月尼に戻つたと記されている。

『善知安方忠義伝』は、将門の遺児たちが天下を我が物とするために、蝦蟇の精霊の力を借りて戦う物語である。将門が影武者を使って七人いるように見せていたのに対して、平太郎（良門）は蝦蟇の精霊からえた妖力によって七人に分身していた。将門から直接能力を引き継いでいたわけではないが、平太郎は将門と同じような力によって天下を奪おうとしている。

#### IV 曲亭馬琴が描く平将門

『報讐癡狂夫』寛政八年（一七九六）刊<sub>（五）</sub>

## 梗概

昔、東山殿の時代に奥州阿武隈川に凶暴な頼がいた。民や百姓の嘆きを聞いた国守は、鉄砲の上手・本間与茂作という侍に頼を狩るように命じる。頼は雄一匹に雌七匹が従うため、雄を一匹狩れば雌七匹狩るのと同じである。そのため与茂作は雄一匹を撃ち、その恩賞として二百石の加増をいただく。その一方、与茂作に撃たれた頼は何とかして恨みを晴らそうと画策する。

与茂作の家には美しい娘しのぶがおり、八人の男が求婚しに来たが、しのぶは全く相手にしなかった。頼はこの八人の若者たちの恋の怨につけこみ、与茂作を討とうと企む。八人の男たちは、与茂作の家に押しかけ婚姻を迫り拒絶された後、夜になって、与茂作の家に忍び込み与茂作を殺す。しのぶは、与茂作が撃ち取った頼の一念の仕業であるうと考え、若党・藤太夫を引き連れ敵討ちの旅に出る。本作では、敵討ちの旅に立出するにあたって、しのぶが曾我の社、ついで神田明神に参詣し、七日間祈り続ける。しのぶの夢中に平将門が現れ、敵討ちの成功を約束する。

しのぶしうなく感涙肝に銘じ、それより神田へ参詣し、又々七日の通夜をして祈りければ、孝行の心天に通じ、神も感応まし／＼給ふにや、夢ともなく現とも

なく神田明神あらはれ給ひ、なんじが孝心にめいじ、遠からずして八人の敵を討たすべし、と、しのぶを子どもに玩物の八つ眼鏡の中へ入給ふと見て、ゆめはそのまゝ、さめにけり。(九丁オモテ)

## ・分身する力の授与

しかるに不思議なるは、四五日すぎでしのぶが身体、影ともなく幻ともなく七人のすがたに見へければ、藤太夫はじめ家内のもの大きにおどろき、世にいふかげのわつらひならんと、大きに案じなやみけるが、よく／＼思へばこれ全く神田の御利生とて八つ眼鏡へ入れ給ふと夢みしはこれなり。(九丁ウラ)

## ・曾我二神と神田明神の援助による敵討ち

八人のもの共、七つの鐘に立出て大磯の堤にさしか、待受けたるしのぶ袖介、親のかたきと名のりかけ、無二無三に斬付くれば、思ひかけなき敵の八人、味方も八人、合せて二八の花むすめ、かたきははらのあらくれ武士、こゝを先途、戦ひしが、こうしん曾我の二神、かん田の明神まもり給へば、向かふかたきも真向梨割、引てゆくのは車斬り、唐竹割りのから田の深み、あるひは輪切千六本、芋大根をきるごとく、かたきは八人まくらをならべ、ついにしのぶに討たれけ

り。(十四丁ウラ・十五オモテ)

この作品では、将門は、神田明神として現れ、しのぶを助けており、怨霊としての側面はうかがえない。また、将門伝説のうち、分身する伝説だけが作中に取り入れられている。

まとめ

本作で扱った近世に刊行された平将門を扱う六作品は三種類に分類できる。

一、将門を滑稽に描く作品。

・『将門  
秀郷 時代世話二挺鼓』

二、将門を神や霊として描く作品。

・『女将門七人化粧』

・『神田利生  
王子神徳 女将門七人化粧』

・『報讐獺狂夫』

三、将門の遺児たちを描く作品。

・『関八州繫馬』

・『善知安方忠義伝』

山東京伝〔神田利生  
王子神徳〕 女将門七人化粧』や曲亭馬琴『報讐

獺狂夫』では、将門は弱者を助ける神として描かれていた。

これらの作品から、将門が江戸時代の人々に神として慕われていた存在であったことが見て取れる。また、『将門 時

代世話二挺鼓』においては、将門は、禍をもたらす恐ろしいものとしてではなく、滑稽な所作を演じる人物として描かれていた。『関八州繫馬』や『善知安方忠義伝』が示すように、恐れとしての対象が、将門から将門の遺児たちに移っていつているようにも考えられる。

今後の課題としては、本稿では六作品しか取り上げられなかったので、将門を扱う作品をさらに読み込み、近世文学に描かれる将門の特徴をより精密に分析し、神田祭との関連など、江戸時代の文化との関係についても考察していきたい。

#### 【注】

(一) 『近松全集 第十二巻』(近松全集刊行会編、岩波書店、一九九〇年)による。

(二) 『八文字屋全集 第九巻』(八文字屋本研究会編、汲古書院、一九九五年)による。

(三) 『山東京傳全集 第一巻』(山東京傳全集編集委員会編、ペリカン社、一九九二年)による。

(四) 『山東京傳全集 第三巻』(山東京傳全集編集委員会編、ペリカン社、二〇〇一年)による。

(五) 専修大学図書館向井文庫本(MO14)、『山東京傳全集 第十六巻』(山東京傳全集編集委員会編、ペリカン社、一九九七年)による。

(六)

「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (三)」(駒澤短期大学研究紀要 第五号) 清田啓子、駒沢短期大学編、一九七七年三月) による。